

っている。

同年兵でフィリピンミンダナオの山の中で、坊ちゃん育ちの人だったが意志が弱かったのか手榴弾で自決した。私は百姓家育ちで我慢強かったので自殺しないで済んだが、観念した時もあった。生き抜けたことに感謝している。この苦勞に耐えぬいた経験が戦後の生活というか、今日の自分にしたものだと思っている。

人間は試行錯誤の中で苦しみ、また失敗を繰り返して少しずつ成長して行くものと思うが、我々の戦争体験は自分ではどうすることも出来ない状況の下におかれていた。人間苦勞すれば自然に生きて行くための知恵やきびしさが身につくことが多いからだと思う。

現代の若者達は戦前に育った私たちにくらべると全く平和で恵まれた条件の中で育っていると思う。それは幸せであっても、人間形成の上では必ずしもプラスでない面もある。精神的に弱い人間であったり、また甘えの強い面が多かったりするように思います。

老兵と妻

兵庫県 伊 森 正 春

私と妻ひろ江が結婚したのは、昭和十六年十一月二日でした。天下の名城姫路城を朝夕眺められる香呂村です。以後、現住所に移り現在に至っています。

当時の姫路は軍都として大勢の軍人がいました。支那事変の関係で出征部隊、帰還して来る部隊と、絶えず日の丸の旗を持った人達が往来し、晴れやかな顔の人や暗く考えこんだような人など悲喜こもごもという様子でした。

私の職業は建築業（宮大工）でした。その頃は新築普請等は少なく一般家屋の増改築や修繕が毎日の仕事でした。非常時という時代ですが、私達夫婦仲よく小さな幸福な日々を送っていました。そうした時職業安定所より呼出しがあり、緊急要員だといって召集を受け、呉の軍港へ連れて行かれました。軍隊輸送船の内

部改装です。

座ると天井に頭があたるような三、四段ベッド（蚕棚）、甲板より外側海面上に突出した便所や青竹を棕櫚縄で編んだ筏作り（沈没時の救命用）等々でした。

一日休暇をもらって厳島神社へ参拝に行きました。

その日

「本本堂発表。本日未明、帝国陸海軍は米英と戦闘状態に入れり」

と発表された。開戦の記念すべき日でした。その後任務解除され姫路に帰り業務に専念し、長女が出生しますます元気で働いていました。

昭和十九年四月十五日、ちょうど長女満智子一歳の誕生日です。市役所より「伊森さん召集令状です」と赤紙が届けられた。吃驚しました。今だから言うことが出来ますが三十三歳にもなった者を召集するようでは日本は敗けるのではないだろうか、妻と共に一夜を語り明かしました。娘もヨチヨチ歩きだした笑顔の可愛い真つ盛りに妻子を残して出征とは「天は過酷な運命を与えるか。」でも日本男子の義務である。

四月二十二日入隊です。自宅から兵営までわずか数百メートルの距離です。毎日朝晩ラッパの響きを聴いていました。が今日からは私自身がこの号音ですべての行動をするのだと思うと複雑な気持ちでした。兵営の鉄条網の外に我が子の遊ぶ姿を見ながら訓練するのもおかしなものです。歳の若い古年兵さんに大きな声で怒鳴られている姿を顔見知りの近所の人に見られるのも苦痛だった。そのような事を妻はどのように見、また感じたかと思えば不憫だった。

約一カ月後転属だといって軍曹さんが迎えに来られ「行先は満州だ」と発表され、「最後の面会だ」、妻や親戚が来て呉れ砂糖のない時なのに甘い大きなばた餅を持って来て食わせてくれた。

妻が国防婦人会の標を掛けて娘を抱いた写真と氏神様のお守りをソット手渡ししてくれた。そして四十余年たった今も耳に残る悲痛な声で「元気で帰って来て」の一言でした。

想へば同期の戦友は全員三十歳代半ばの者ばかりです。妻あり子ありでしょう。こんな老兵が外地に出て

行くようでは日本は危ないぞとヒソヒソ話し合った。

「いざ出陣」姫路護国神社に勝戦祈願を行い、駅前通りを行進しました。沿道は見送りの人々々々です。その中に娘を背負った妻が小旗を振っているのです。眼と眼が合った瞬間に電気が背筋を走り突き上げて来るものがあつた。これが最後かも…。

かくして満州佳木斯の第二四部隊の屯営に五月二十日到着しました。隊内は若い兵隊で一杯でした。私達は老兵だといって特別大切に取扱われ、訓練もゆつくりして呉れました。いつも苦しい時には胸のポケットに手を当て、(妻子の写真) 人に聴こえぬような小さな声で、その名を呼びました。そして私は元気でやっているぞ、これがいつも心の支えでした。

二カ月程経過したある日、なんだか慌しい雲行きの様子です。本隊は満州東北隅の富錦・同江地区に陣地構築に出動しています。営内には警備要員と私達老兵のみです。古年兵に「何事ですか」と尋ねたら「動員だ」と一言のみ。私達にはなんのことか解りませんでした。築城より本隊が帰営し、自動車も戦時充当車輛

を格納庫より引出し、全員一装用の軍装で営繕・陣営具・兵器・弾薬・庶務書類等々、全員が大車輪でやっていました。

私達同期の兵は何をしてよいのかたゞ命ぜられた事をやるだけで、ボサッとしてました。八月五日出動、佳木斯駅で自動車を貨車に積み込み釜山まで運ばれました。

僅か二カ月余り満州にいただけです。その間営外に一步も出ることもなく、西も東もわからぬまゝ、また釜山の港まで帰って来たのです。戦友と「このまゝ、日本に帰れたら良いのにな」と話した。乗船し門司の港に入って二日間、甲板にも出られず私が以前作ったことのある船内蚕棚ベッドに辛抱強くジッと寝てました。

八月二十八日、下船命令で上陸すると台湾の基隆です。台湾全島防衛が第十師団の任務でした。師団は兵庫、岡山、鳥取三県が徴兵区で、現役兵を主力にした勇猛な鉄兵団です。たゞ私達二十六名だけが老兵です。これが軍隊語の員数合わせというところで兵員の不足

分の穴埋要員だったのでしょうか。またまた移動命令発令です。

十二月十日、高雄出帆、レイテ島に向って航行しました。バシー海峡は波高く全員船酔いです。途中より行先変更でマニラに上陸です。この時点においてレイテ島は米軍の猛攻撃で玉砕戦闘中とのことでした。

十二月十四日マニラ上陸、これから二十年九月二十日戦闘停止、武装解除までの間、私達も若い兵隊に遅れを取るなど全員一丸となって戦いました。ルソン島最大の激戦地バレー峠での悪戦苦闘、本来の任務である輜重隊（兵員、弾薬、諸物資の輸送）が歩兵に改編されて第一線に米軍を迎え撃つべく出動しました。

優勢な米軍機動部隊と交戦三カ月、来る日も来る日も敵飛行機の爆撃と地上砲火。こちらは弾薬、糧秣、飲水も少なくこの戦闘につきましては種々なお方がそれぞれ書物にしておられますから省略します。ただ同期の戦友が二、三名戦死し、三名のみ生存復員したことは確かな現実です。

私は妻宛に十九年七月、満州より髪と爪と遺言状を

送った。それ以来一通の軍事郵便も出せませんでした。散華した戦友も全員同様と思うと心が痛みます。

武装解除後のPW生活も僅かでした。米軍の取り計らいで第一陣の復員船で傷病者と老兵が帰国出来ました。

二十年十二月二日、博多港に上陸、復員事務手続完了後一目散に我が故郷へ帰りました。勿論出征時に妻より渡された写真は胸にしました。でも角は破れ色あせて染みが出来ています。

「帰ったぞ」、一言のみ、あとは絶句です。妻は呆然とし子は父の顔を忘れ、たゞヂッと見詰めるだけだった。私も気の緩みか玄關に倒れた、と同時に悪寒が襲った。

「アツ熱帯マラリヤが出た」妻は二度吃驚でした。乗物がないので手押車に乗り子供を背負った妻が引張って十キロも離れた実家へ行きました。その後姿を見ながら四十度の発熱した頭の中で「私はもう死んでも良い。思い残す事はない……」。妻の心も知らず男の自分勝手だ。

四カ月、静養に努めて元気になった。その後も再三発熱した。療養中に妻が銃後の護りだと、私の出征中のことをボツボツと話した。「無事に帰って来たから全部帳消しです」といいながらも、恨み辛みを。

出征の翌日には町会長さんが表札と並べて出征兵士の家と書いた板を貼りつけて「これからは何でも言つて下さい」と言葉を残して帰られた。それでも町内の仕事は男のいる家も出征兵士の家も均等割でした。なんでも配給生活ですが男不在の家には残り物を少し分けて呉れる程度で、役員の中にはお情で面倒を見てるというようでした。子供も両親のいないで遊んでいてもすぐ解る位で、可哀想な事が多かった。毎晩子供に添い寝しながら「今頃何所でどうしているか」と思いながらウトウトすると鶏の声で眼を醒まし朝になる。毎晩が睡眠不足でした。

お金は有りましたが、金で物が買えない時です。親からの仕送り（食物）と子供を連れて農家の手伝いに行き、米やいも等を貰ってどうにか生活していた……とか。戦場では私が生命がけだった。家では妻子が生き

て行くため筆舌に尽くせぬ思いをした。今子供等にそうした悲惨なことや苦勞のことを話しても「あ、そう」というだけだ。

私達夫婦にとりましては、長い人生の中で、一番恐ろしい悪夢の空間でした。二度と戦争のない平和を祈ります。このような話し相手の妻も、先年帰らぬ人となりました。私の後から行つてほしかったのにな……。

〔話の途中にも、終わってから彼の目に光るものを二、三度見た。〕

回 想

福島県 伊 藤 司

一 輸送船乾瑞丸轟沈記

昭和十九年十二月二十三日の朝、台湾の高雄港を出航して六日目、わが乗船の老朽輸送船「乾瑞丸」は、途中、機関に故障を起こしたために、船団主力から取り残されて、ただ一隻、上陸地点のリンガエン湾北サ